

曹洞俳壇

選・村松五灰子

一脚は床にとどかず茄子の馬

静岡県 佐野 和彦

評 孟蘭盆会。精霊棚に茄子や胡瓜で作った馬を飾り、ご先祖の御魂をお迎えしたり、送る時に乗って貰うために作る。昔からの懐かしいお盆の行事。宗派によって方法は違うようですが。その中の一脚が届かないこともユーモラスで、先祖共に揃う一族の和やかな雰囲気、この句が象徴的に語る。

夏痩せを知らぬ笑顔の妻で良し

三重県 山下 利夫

評 健康がまず一番。そして何よりも勝る妻の笑顔。夫のおらかな愛情。明るく楽しい家族の様子までもが感じられる。

◆深夜便硝子のやうな声涼し 長野県 下島 博

◆百日紅地藏顔なる僧侶かな 長野県 田中 晃子

◆見栄を捨て等身大や風涼し 福岡県 安部 正和

◆命ある限り折鶴原爆忌 埼玉県 小林 茂之

◆石鹼に寺の匂ひや今日の秋 青森県 中田 瑞穂

◆二人分づつを冷凍冷蔵庫 愛媛県 井上 征郎

◆揚花火一つは星となりぬべし 山口県 御江やよひ

◆赤貧の汗で育てた子は素直 岩手県 上沖 貞子

◆炎帝や雲水整枝ひたすらに 神奈川県 池亀 恵子

◆片付もせぬまま老の梅雨の入 熊本県 福島 隆子

*選者吟

逢ひたいと思ふ心が大根提げ

五灰子

*作句小見

明治四十四年、浅草生まれの伊藤柏翠は結核で鎌倉の鈴木療養所に入院。そこから同じ鎌倉の虚子庵に通いました。そして処々の事情で福井三國に移り同じ病の森田愛子と暮らしましたが、愛子は二十八才で没。俳句を通して柏翠・愛子・虚子との俳句の交流を虚子は小説『虹』にかきました。

悲しく美しい事実小説です。柏翠没今年で十六回忌でした。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

きみに逢う以前のぼくに逢いたくてジャー
ジーを着て楕円球追う 東京都 野村 信廣

評 鍛えられた身体を激しくぶつけあつて闘ういかにも男らしいスポーツ、ラグビー。学生時代、ラガーとして鳴らした作者に違いない。下句でそれと暗示し、上句の詩的表現によって現実には引き返せない時間を手に入れようとしている。

夜のふかく目醒めて想う代搔きし濁りし水
が澄みてゆくさま 長野県 毛涯 潤

評 田植の準備に水田に水を引き入れ土をならしたその夜、目覚めて、泥が沈殿し水が澄みゆく様を想像する。稲作への敬虔な思いが祈りにも似て静謐に伝わってくる一首である。

◆ 麦畑肩にかつげる釣竿の先に満月かうかうと輝る

福岡県 三吉 誠

◆ 古書店のいつもの棚に本探し土曜の午後のゆるり流るる

山口県 中井 清子

◆ 先生と呼吸を合わせて枹を振る夏空高く園児の太鼓

茨城県 太田 弘美

◆ 汚染土の袋連なるふる里にうぐいすの声高くひびけり

東京都 鈴木 正作

◆ 新ジャガの一畝掘りて子に送る吾が文添えてバターも添えて

新潟県 星野 三典

◆ 生れし家に米寿迎える新春の朝しんしんとして雪降りつもる

高根県 雑賀 花子

◆ 今年また逢えましたねと声かくるおはぐる蜻蛉は夫の魂かも

山形県 菊池 恵

◆ 分校の運動会に村びとの総出となりて山びこ膨るる

秋田県 小田篤恭葉

◆ 折鶴のことりとさわぐ春の風仲間をふやし千羽となりぬ

神奈川県 安永 廣子

◆ うらやましきは恋猫の恋生まれ変り初恋の人に思い捧げん

カリフォルニア 井上 健一

* 選者詠

淡々と為すべきを為す日々にして触媒のよ
うな初秋の光 ちづ

* 作歌小見

月が出るまで釣りを楽しんでいた三吉さんの歌、釣竿をか
つぎ飄々と帰る様子が一幅の絵のよう。おはぐる蜻蛉に亡き
夫の魂を呼び寄せる菊池さん、折鶴の千羽がさざめきあうと
する安永さんの想像力、などにも豊かな詩心を感じました。



大本山永平寺



冬安居とうあんご

紅や黄と鮮やかに色成す紅葉の季節となりました。

ここ永平寺では、年間を通して十一月のお参りが最も多く、六万人以上の参拝者が全国各地より訪れます。

季節を表す二十四節気では、十一月七日ごろを「立冬りっとう」といい、曆の上では冬となります。永平寺では修行の先頭を務める首座寮が立ち上がり、諸準備を経て、十五日から年明け二月十五日までの三カ月間、禁足修行である冬制中ふゆせいちゆうに入ります。そして、二十一日ごろを「小雪しょうせつ」といい、早い年ですと雪が降り始めるころとなります。このころ永平寺では、本格的な冬を迎える準備の雪囲い作務を致します。

夏制中なつせいちゆうで梅雨の湿気や暑さに耐え、汗でびしょびしょになりながら修行に励んだ修行僧たちは、今度は厳しい寒さに身体は芯から冷えきり、指先が動かしにくくなり、耳・手・足のしもやけやひび割れの痛みに耐えながらの修行となります。

道元禅師さまは、「寒さの苦しみを恐れてはならない。修行を怠ることを恐れなくてはならない。寒さが人を損なうのでない。怠ることが人を損ね、生き方を誤るのです」とお教えくださっております。

寒さが厳しくなるにつれ、永平寺は静寂に包まれて参ります。修行僧たちは、怠ることなく修行に励みます。



大本山總持寺



御移転記念日

十月二十日に、全国のご寺院さま・檀信徒皆さまのご協力により二祖峨山禪師さまの六百五十回大遠忌正当法要を大円成することが出来ました。五十年に一度の大遠忌を無事終えることが出来、本当に皆さま方のご協力のお陰と心より御礼申し上げます。正当法要の後も、十一月末まで大遠忌の法要は続いており、連日多くの焼香師さまと檀信徒の皆さままで賑わっております。

さて、十一月五日は、今から一〇四年前に總持寺が能登から横濱鶴見に移転し、その遷祖式が盛大に行われた日です。

總持寺では、毎年この時期に記念の式典や行持が行われております。その内容は、記念法要の他に大茶会・華道展・万灯供養・稚児行列などです。

特に三日には地元の方たちと協力して「つるみ夢ひろばイン總持寺」が開催されますが、今年で四回目を迎え、すっかり横浜鶴見の秋の風物詩として区民の方々に定着してきました。

御移転記念行事が終わると、十三日から冬安居「制中五則」に入り、心新たに弁道に勤しみます。そのクライマックスが首座法戦式です。また二十一日は總持寺を開かれた瑩山禪師さまの降誕会（誕生日）です。そしていよいよ臘八接心を迎える時期となり、修行僧たちの顔つきも一段と引き締まってまいります。